

編集後記

この本の企画から出版まで約2年経過した。企画の最初の時点で、野田雅博博士、木村博一博士らに、わが国では臨床医・基礎医学者とともに検査や疫学を行う研究者や技術者に幅広く利用していただくウイルス、特に検査技術に関する新しい書籍が求められていると言われた。確かにかつて国立感染症研究所が国立予防衛生研究所と称した時代に学友会編の「ウイルス実験学総論」「ウイルス実験学各論」という書籍があった。検査技術が充実した書籍であった。ウイルス学の日進月歩のなかで、このような臨床と検査診断で新しい内容を含む書籍が望まれた。そして今回、羊土社の理解、協力を得て「ウイルス感染症の検査・診断スタンダード」として出版出来て嬉しく思う。出版社とともに、国立感染症研究所の田代真人先生、倉根一郎先生、岡部信彦先生、木村博一先生には責任者として力を尽くしていただいた。

感染症は病原体と宿主の関係で成り立つが、自然環境、動物との関係が深い。そして新興・再興感染症が次々に出てきている。さらに感染症は病原体の進化、治療薬やワクチンなどの予防薬と密接な関係がある。この本はウイルス感染症の検査・診断に関係する専門家に最新の知識・方法に基づいて執筆を願った。その結果、ウイルス研究者の座右の本となりわが国の感染防御・予防の即戦力にもなることが期待される。さらに、私が過去にそうであったように、感染症に興味をもった若き医療従事者に、ウイルスに進むきっかけの本となることが考えられる。またすでにウイルスの検査・診断を日々行っておられる方々には、実際の検査・診断の現場においてはこの本を現場にあったように改められたり、さらに新しい方法を加えたりするためのスタンダードとして利用していただければと思う。臨床編においては呼吸器症候群、中枢神経症候群、皮膚発疹症候群、消化器症候群が中心となり、ウイルス性肝炎、眼疾患、性感染症、周産期感染症、国際(輸入)感染症や人獣感染症などの「その他の症候群」が短い感じもするが、限られたページ数のなかでよくまとめていただいた。願わくば、読者からのコメントを加え、より良い本に今後改訂したい。

2011年5月

日本大学医学部病態病理学系微生物学分野
牛島廣治